

## アメリカ科と中屋健一先生

第17期 森川 建夫 (1969年卒業)

先般、アメリカ科17期卒業生の同窓会が久しぶりに開かれ、同期7人のうち関澤秀哲君、古市公久君、池上千寿子さん、瀧田佳子さんの5人で楽しく飲み、食べ、おしゃべりに興じた。ここまでは良かったが、帰り際に宿題を出されたので、さてどうしようかと迷った末こうしてパソコンに向かっているところである。

振り返れば今から51年前、大学2年の秋に当時理科一類だったが理科系への進学を諦め文科系へのコース変更を模索中だった時、教養学科が唯一門戸を開いていることを知った。そこで国際関係論を皮切りにいくつかの分科の進学案内をチェックした結果、アメリカ科を選択したのであった。すでに中屋先生の授業が厳しいということは知れ渡っていたものの、今から思えば怖いもの知らずで、単純にアメリカにあこがれていたのだと思う。多分、父親がかつて船長をやっていたので、知らず知らず将来は国をまたがる仕事をしたいという意識もあったかと思われる。

進学後は中屋先生の文字通りのご薫陶を受け、週2回のアメリカ史のゼミでは前日の徹夜でのアサイメントとの格闘が常態化し、終われば同期の「7人の侍」が打ち上げと称して大いに遊んだものである。中屋先生のご指導は厳しい中にも学生に対する愛情あふれるものだったと記憶している。たとえば、冬のスキー合宿がその好例で、池の平スキー場をいまでも懐かしく思い出す。そして授業以外で教わることのなんと多かったことか。世田谷のご自宅に招かれ、生まれて初めてシーバスリーガルをご馳走になったこともその一つで、それまでウィスキーといえばトリスしか知らず、最高級がジョニーウォーカー黒ラベルと思い込んでいたのでまさに衝撃的な味であった。以来、経済的に余裕ができてからはシーバスをひたすら愛飲している。大学3年になると、経済学に興味を持ち、村野孝ゼミに入って国際金融論を学び、卒論は嘉治元郎先生のご指導のもと“From Dollar Shortage to Dollar Glut”というテーマで書き上げたが、なんといっても初めての英語での論文提出であり、文字通り四苦八苦して「生みの苦しみ」を初めて味わった次第である。生来の怠け癖のせいで締め切り1週間前から徹夜続きで必死でタイプを打ち、締め切り当日にやっと仕上がって教養学科事務局に提出した時は心底ほっとした。この時のトラウマはな

んと50歳近くまで時々夢の中に出てきて、そのたびにしまった、間に合わない！と冷や汗をかいた。

アメリカ科の良いところは歴史にはじまり、経済、政治、文学、宗教などなど、幅広い分野を一流の先生から学べたことである。加えて全く関係ない西洋美術史を受講したが、高階秀爾先生の講義は本当に面白く毎回心待ちにしていた。まさに教養学科の面目躍如だったと思う。ちなみにその時に一番印象に残ったイタリアルネッサンスの代表作、サンドロ・ボッティチェリの「春の寓意」と「ヴィーナス誕生」を今年7月にフィレンツェのウフィッツィ美術館で観たときの感激は忘れられない。また中屋先生からはアメリカは南北あって合衆国だけがアメリカではない、と教えられたが卒業後の人生を振り返ればまさに至言で、スペイン語を学生時代にやっておいて良かったとつくづく実感した次第である。仕事でのパナマ駐在4年に加え、退職後のシニア海外ボランティアとしてさらにパナマでの活動が4年3カ月、ペルーが2年、合計すればなんと10年強を中南米で生活し、今ではスペイン語のほうが英語よりも口から出てくるようになっている。そして“アスタマニャーナ”の言葉に代表されるラテンアメリカ文化にどっぷりと浸ったおかげで心配症が治り、忍耐強くなったと思う。もっとも現役時代はよくパナマぼけ、といわれたものだが、退職後の10年間はスペイン語のおかげで充実したボランティア生活を送れたのは元をたどればアメリカ科ということになろう。そして今は70歳を超えいわゆる遊行期に入ったが、趣味のスペイン語会話と海外旅行、そしてゴルフを楽しんでいる。ささやかな社会貢献として今年4月から地元調布市で外国人生徒対象の「子ども日本語教室」の教師のボランティアを週2回始めたが、これも海外生活20年半でお世話になった現地のかたがたへの恩返しと思っている。日本語とくに漢字は子供たちにはとても難しく、学校以外でしっかりと学ばないと中学、高校への進学は相当大変で、やりがいのあるボランティア活動として元気な間は続けていくつもりである。